中村哲 vs.小林よしのり

慌ただしく日本とアフガニスタンを往復する中村哲医師。
昭和59年に「ペシャワール会」を発足、
アフガンで医療活動を始めた中村氏は、平成12年、ついに井戸を掘ることを決意する。
そこから始めなければならないほど、現地は悲惨で何もなかったからだ。
今なお戦闘の繰り返される地域で、金銭的報酬もなく、
ただ人々のために医療を続ける中村氏は何を見るのか?
タリバン政権、国連制裁、米軍の攻撃、そして復興支援……、
穏やかな口調で語られるアフガニスタンの真実の姿に、
編集長は大きく驚き、共感した。福岡での熱く静かな150分。

撮影—村山史典

アフガンの真実対談

ゲスト 中村哲
(医師・ペシャワール会現地代表)

メディアのアフガン報道は嘘とインチキだらけ

小林　中村先生は本来、医者でありながら、今はアフガニスタンで井戸を掘ってらっしゃる。そういう個人の地道な活動をわしは非常に尊敬しております。たとえば台湾では、日本の統治時代に重要な仕事をした日本人教育者7人のうち殺されてしまった6人が今でも「六士先生」と呼ばれて尊敬されているし、ダムを設計した八田與一も命日に追悼式が行われるほど敬愛されている。単に国の威厳を守るために自衛隊を派遣しておけばいい、という発想では、そうはならない。もっと相手のためになるような形で貢献しなければいけないですよね。

中村　それは向こうで仕事をしていると実感します。誰を喜ばせるためにやっているのかわからない支援が山ほどありますから。

小林　そうですか。そもそも日本では、カルザイ政権にお金を出して以降、パッタリと報道されなくなってしまったんですが、現在のアフガニスタンはどういう状態になっているんですか。タリバン政権を潰した後、アメリカはイラクと戦争をやり、それが終わったら次はイランという形でどんどん進んでいますけど、現在そして、これから行われることの意味を考える上で、原点であるアフガンを忘れてはいけないとわしは思っています。

中村　たしかにアフガンに関する報道は、ちょうど昨年（平成14年）ワールドカップが始まったあたりから、ぷっつり切れてるんです。だから多くの日本人は、アフガン解放があって、一応は自由な国ができたんじゃないか、という印象を持っている。そこまでしか知らされてないから。でも、私はあの国で20年ほど仕事をしていますが、はっきり言って今が最悪の状態です。

小林　そうなんですか？　タリバン政権時代よりも悪い？

中村　ええ。アメリカは「アフガンという成功例をもとにイラクを攻撃する」なんて言いましたけど、とんでもない話です。あれが成功例だなんて、何を根拠にそんなことを言えるのかと思いますよ。

小林　日本では、「アフガンの女性がブルカ（宗教上等の理由から、頭もしくは顔を被うための布）を脱ぎ、自由になってよかった、よかった」って話になってましたけどね。

中村　そこからして認識が間違っております。ブルカを脱いでなんていないんですよ。たしかにカブールあたりでは脱いだ女性もいるかもしれませんけど、あの街はアフガンの中でも特殊な地域で、一部の開明的な人々が西洋的なサロンを作っているようなところなんです。でもブルカは昔からアフガンにある習慣で、今もほとんどの女性が被っている。彼女たちからあれを取らせるなんていうのは、日本人に「味噌汁は臭いからコーヒーを飲め」というような話。99パーセントの女性は取ってませんよ。

小林　へえー。日本のテレビなんかでは、あのブルカ自体がタリバンによる抑圧の象徴であるかのように言われてましたけどね。

敵、味方がわからない状況で、ベトナム戦以上に苦しむ米軍

中村　そもそも、その土地に昔からある文化や慣習について、外国から来た人間が「これはいい、これは悪い」などと言うこと自体がおかしいと思います。タリバンも同じ。アメリカは「悪のタリバン対正義の米軍」という図式を作り上げましたけど、タリバンと言ったって、そんなに特別な組織ではなくて、そのへんを歩いてるオジサンやお兄さんもその一員だったりするんですよ。アフガン人を見ただけでは、どこまでがタリバンで、どこからがタリバンでないのか、わからない。表向きのタリバン、表向きの反タリバンはありますけど、地下ではみんなつながってるんです（笑）。まずは食っていくことが大事、アフガン人として食っていこうという共通した認識があるんですね。だからアメリカの兵隊も大変だと思いますよ。

小林　ベトナムみたいになっちゃいますものね。あのゲリラ戦ほどではなかろうけど、似たようなものでしょう。

中村　いや、あれ以上だと思いますよ。

小林　ほんとに!?

中村　ベトナムの場合、米兵はまがりなりにも前線で戦ってましたけど、アフガンでは戦闘機やヘリに乗って空中戦をやっているか、基地の中に引きこもっているかのどちらかです。地上移動すると何かが起きるから危険で動けないんです。それ

で地上での仕事をアフガン人の下請けに出すと、その下請けがいつ反乱を起こすかわからない。米兵は憂鬱だと思いますよ。たとえば、米軍の傭兵が、日当とライフルを貰って、その仕事の帰りがけに米兵を狙撃したなんてこともありましたから。

小林　ほー！　すげえなー（笑）。

中村　だから、誰が敵か味方か米軍にはよくわからない。そう考えると、アメリカはアフガンで成功したか失敗したかという以前に、これはもう負けてるんですね、実質的に。もう早く帰りたくてたまらないんですよ。つまりアメリカが対象にしていた敵というのは、アフガニスタンの文化そのものなんです。

小林　なるほど。で、そのタリバンが退治されても、国内は良くなっていないんですね。

中村　タリバン政権時代のアフガニスタンはおおむね平和に統治されていたんですが、今や治安が乱れ、強盗ははびこり、阿片・モルヒネなどの原料になるケシ栽培も復活しています。たしかにタリバンには宗教上、厳しすぎる面もありましたけど、彼らは一種のイスラム国粋主義的な運動だったんですね。だから非常に潔癖なところがあって、ケシ栽培も「けしからん」と、徹底的に潰して回ったんです。この20年間の中で、アフガンからあんなにケシの花が消えた時期は他になかったですね。ところが今はそれが復活して、麻薬の生産高はものすごく上がっている。世界の麻薬の46パーセントがアフガニスタン産だと言われているぐらいです。それ以外にも、たとえば女性が相当に殺されたりしていますし、とにかく惨憺たる状態ですね。だから一時、テレビに映った「アフガン解放」は、米軍やメディアによって演出された解放でしかなかったということ。実際には、事態はかえって悪くなっている。それが、まったく伝えられていません。

九割が農民・遊牧民のアフガンに、アメリカの価値観は通用しない

小林　警察組織みたいなものはどうなってるんですか。

中村　もともと、ちゃんとした警察組織がない世界なんですね。これも日本で誤解されているところでして、アフガニスタンという国は地域の伝統的自治組織（ジルガ＝長老会議）が集合してできた珊瑚の塊みたいなもので、われわれが想像するような近代的中央集権国家とは違うんです。一つの政府があって、それに統率されて国会で何かが決まって動いていくような世界じゃない。それぞれの地域がそれぞれの決定をして動きながら、しかも一つの塊として存在している。ちょうど戦国時代の日本みたいなもんです。だから、隣の村が戦争していても知らないとか、隣の村がアメリカ軍になびいてもうちは違うとか、そういうことがいくらでもある。

小林　なるほど。各藩があって、お互いに戦ってるような感じ。じゃあ、みんな同じ「アフガン国民」という意識はないわけですか。

中村　ないと言うと語弊がありますし、自分たちがアフガン人だという意識はかなり強くありますが、われわれの思っているような「国民」とはずいぶん違うと思います。外敵に対してはアフガン人として立ち向かうという面が歴史的にもありますけど、かといって、まとまった国家体制で動くという国じゃない。各地方の長老会というのが政治の実権を握っていて、法律も不文律みたいなもので、ちゃんと決められているわけではありません。ですから警察組織も、日本や欧米諸国とはちょっと違いますね。

小林　なるほど。普通の法治国家とは違うわけだ。その不文律というのは、宗教的な慣習法みたいな

メディアのアフガン報道は嘘とインチキだらけ

メディアのアフガン報道は嘘とインチキだらけ

ものですか。

中村　宗教も交えた、その地域の慣習法で動いているんです。たとえば「客が来たらもてなす」とか、「復讐は必ずする」とか、「婦女暴行は処刑する」とか。そういう調査や処罰は警察や裁判所がやるんじゃなくて、住民が自分たちでやるんですよ。タリバン政権は、そういうアフガン的な文化に則った形で地域を指導していたんですね。

小林　じゃあ、現在のカルザイ政権というのは何をやってるんですか。一定の法律を作るとか、警察を作るとか、そういうことをやってるわけじゃないんですか。

中村　先ほども申し上げたように、カルザイがいるカブールは特殊な地域で、戦国時代でいえば京都のお公家さんに近い立場なんですね。でもアフガニスタン人の九割は農民・遊牧民で、彼らにとっては誰が公家になろうと、極端に言えばどうでもいいことなんです。だからカルザイ政権に何かを期待しているわけではないでしょうね。ただ彼らにも、早く自分たちの生活を改善したいという気持ちはあって、やって来た外国人たちがそれをちっともしてくれないという焦燥感がある。しかも、自分たちの慣習についてとやかく言われるので、余計にフラストレーションが溜まるんですね。だから支援に入ったNGOなどの国際組織が逆に襲撃されたりして、今では地方には行けない状況です。いずれにしろ、カブールの現状だけを見て、アフガニスタンで起きていることを理解したつもりになってはいけません。そういう誤解を生む報道に責任があるんですが。

小林　なるほど。テレビなんかで、ときどきカブールあたりに行って、記者が「アフガニスタンでも学校教育がなされるようになった。だから昔に比べてはるかに自由になった」みたいな伝え方をしますけど、あれはアフガンのほんの一部しか見ていないということだ。

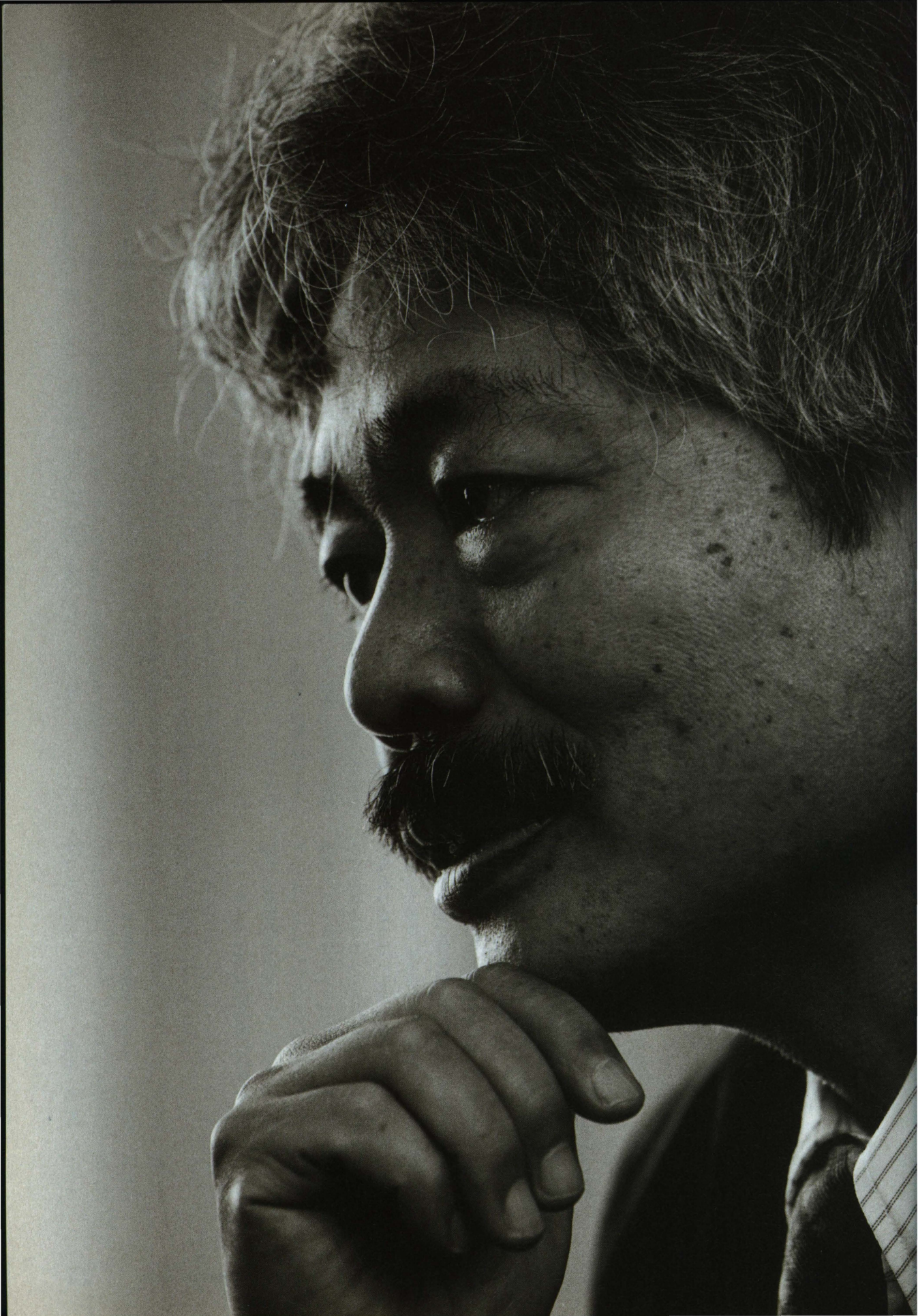
中村　取材する地域や対象が狭すぎるんです。今は地方に行こうとしても「危険だから」と遠ざけられてしまうせいもあるでしょうし、もちろん記者自身がそういう視点を持ってないということもあるでしょうけど。

小林　やはり、その土地の文化を理解しないといけませんよね。アメリカの場合は、そもそも理解する脳味噌を持ってるのかと疑うぐらいのひどさだけど、日本だって、今や「自由と民主主義」が最大の価値になっちゃってるから、その視点からしか相手を見ようとしない。相手の伝統や文化がどんなものなのかを理解しないで、自分たちの価値観と合わないものを悪だと決めつけてしまうんです。

中村　文化は地域によって違うし、民族によって

中村　哲

なかむらてつ：医師。ペシャワール会現地代表。昭和21年、福岡県生まれ。九州大学医学部卒。福岡で診療を行いながら、昭和58年に「ペシャワール会」を発足し、アフガニスタン無医地区山岳部での診療や辺境山岳部への移動診療を行う。平成12年から中央アジア、特にアフガン国内を襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧・用水路建設。2000カ所の水源確保を目指す）事業を実践。さらに昨春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地」プロジェクトに着手。現地スタッフ約900名、日本人ワーカー約15名。年間診療数約20万。著書に『ペシャワールにて』『医者井戸を掘る』（以上、石風社）『ほんとうのアフガニスタン』（光文社）『辺境で診る辺境から見る』（石風社）など多数。ペシャワール会の詳しい活動内容と募金については、HPを。HPアドレス http://www1m.mesh.ne.jp/~peshawar/



違うし、時代によっても違う。違いがあるのが当然であって、そこに善悪も優劣もないと思うんですね。ところがアメリカや国連は、自分たちの価値軸だけで物事を判断してしまう。そこにまず問題があると思いますね。いいか悪いかなんて、外国人の知ったこっちゃない。たとえば「納豆は臭いから食うな」なんて外国人に言われたら、余計なお世話だと思うでしょ？　相手の文化は認めた上で、その範囲内で彼らが幸せになるにはどうするのかを考えるべきなんです。

英米が戦う、タリバンという亡霊

小林　たとえばアフガン空爆のときもそうだし、イラクを攻撃するときもそうだったんだけど、日本にいるアフガン人やイラク人にインタビューするじゃないですか、テレビのニュースなんかで。すると、アフガン人は「自分はタリバン政権にリンチを受けた。だからアメリカに潰してもらいたい」と言うし、イラク人は「フセイン政権にひどい目に遭わされたから、あれを潰す戦争は賛成だ」と言いますよね。

中村　外国に逃げたアフガン人は、アフガン人とは言えないんじゃないかと私は思いますね。そういう人たちが、アフガニスタンをダメにしていくんです。外国に頼って自分の理想を実現させようなんて、他力本願もいいところですよ。われわれだって、仮に小泉政権を倒そうと考えたとしても、アメリカ軍に頼んで爆撃してもらったりしませんよね。やるなら自分たちでやります。

小林　そうですよね。ところがテレビでは、いかにもそれがアフガニスタン人の代表的な意見であるかのように扱う。あれで騙されてる人はかなりいるはずです。あと、これはときどき報道されることですが、今もタリバンがいて米軍と戦ってるという状態もまだあるんですか。

中村　あります。まだあるどころか、だんだんひどくなってきてるんですよ。爆撃の規模は小さくなってますが、地域は拡大している。英米軍も増強されてます。つい二週間ぐらい前にも、カブールの日本大使館から「アフガニスタンへの渡航を見合わせるように」という勧告が出ました。とくにジャララバードとか東のほうが危ない。私は仕事だから行きますけど、あちこちで戦闘が広がりつつある。アメリカは一年後の二〇〇四年六月に帰るという撤退宣言をしているので、おそらくタリバンはアメリカ軍が帰るのをじっと待ってるんじゃないでしょうか。

小林　じゃあ、戦争が終わったなんて、まだ全然、言えないですよね。タリバンもまだ消えてないわけだし。

中村　そもそもタリバンといったって、実態があってないようなものなんですよ。たとえば、われわれが「国際社会」と言うとき、そこに具体的な実態はないですよね。でも「国際社会」というものはたしかにあって、日本もその一員として行動している。それと同じように、タリバン勢力といっても実態がない。タリバンの考え方そのものが、アフガンのディシプリン（規律・風紀）になっているんです。だから「タリバンを潰す」と言っても、それは亡霊を相手にするようなもの。国際社会とタリバンの対決というのは、亡霊と亡霊の対決みたいなものですね（笑）。

タリバンが石仏破壊に込めた本当のメッセージ

小林　パレスチナでは、今はハマスが敵視されてますよね。でもハマス自体がパレスチナ人民の支持で成り立っている。だからわしも、「ハマスを潰すってどういうことになるんだろう」と思ってたんやけど、何か限定した形のある組織体があると思っていると、大きな間違いを起こしかねないということですね。

中村　そうです。もちろん、ある地域の中でその文化を先鋭に代表する人々はどこにでもいるわけで、アフガニスタンの場合は、それがタリバン政権なんですね。ただし、その裾野というのはじつに広い。ところがアメリカや国連は、山の頂上だけを見ているわけです。

小林　パキスタンあたりのモスクで教義を唱えている原理主義者が、タリバンを育てているという言い方もされてましたけど。

中村　たしかに、政治勢力としてのタリバンはそういう形で作られるんですが、そのメンバーはたかだか一万数千人しかいません。それだけの集団で、あの人口2000万人の国を統一するのは不

可能です。あそこは山ばっかりですから、全土を掌握するのは大変なことです。ソ連軍でさえできなかったんですから。にもかかわらずタリバンがアフガンの95パーセントを掌握できたのは、もともとそれを受け入れる素地があったからです。タリバン政権が土地の慣習法をそのまま成文化したような形で提案し、それが地域の長老会にも受け入れられた。これは従来のアフガニスタンから見ればすごい進歩でした。それまでは、まあ「解放後」の今ほどひどくはありませんが、強盗や襲撃事件がしょっちゅうあって、「誰でもいいから秩序をもたらしてくれ」という気分が蔓延していた。そこに現れたのがタリバンだったんですね。われわれが見るかぎり、これまでで一番潔癖な政治権力でしたよ。

小林　やっぱり、その国の文化を理解しないと統治なんかできないということですよね。タリバンがバーミヤンの大石仏遺跡を壊したのも、あれで世界の目を自分たちの文化に振り向けようという感覚だったんでしょ？

中村　いろんな見方があるでしょうが、あれもタリバンの潔癖性の表れだと私は思いますね。バーミヤンの遺跡はあの石仏だけでなく、他にも多数の石窟寺院があり、その中の小さな仏像とか考古学的な資料がものすごい高値で取り引きされていて、相当に乱れた状態だったんです。外国人が商売のために、賄賂を使って地元の高官を買収したりしていた。それでタリバン強硬派が、「そんなことを許しているから、われわれは締まりがなくなるんだ。そうやって宗教を愚弄するぐらいなら、こんなもの潰してしまえ」ということから破壊したようです。

小林　なるほど、それは初めて聞いたなー。

中村　たしかに石仏破壊というのはショッキングな出来事でしたけど、むしろタリバンの時代は、他の博物館や遺跡に対する犯罪行為は厳しく取り締まってたんです。

インディアンを人間とも思わぬ、出来の悪い西部劇を繰り返すアメリカ

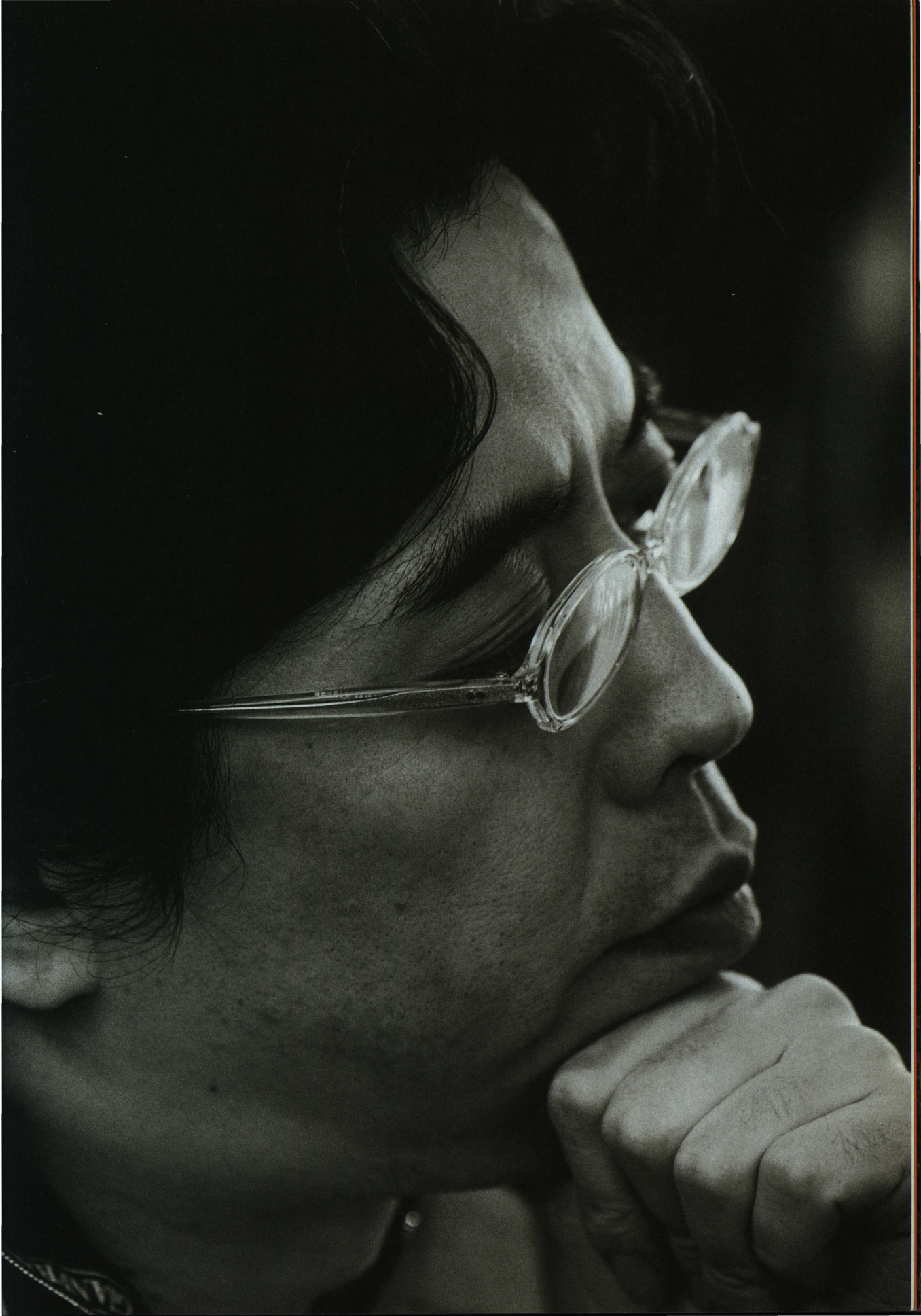
小林　へえー。あの遺跡を壊したことで、すっかり野蛮人というイメージが定着しちゃいましたけどね。しかも、そのタリバンが悪者扱いされる一方、北部同盟は善人であるかのように言われてました。

中村　ええ。これもおかしな話で、タリバンと北部同盟の関係は、かつての台湾と中国みたいなものだと思えばいいんじゃないでしょうか。ただ、北部同盟はわりと西欧の報道陣にウケがよかったんです。9・11直前に暗殺されたアマハド・シャー・マスードを始めとして、リーダーが個人として魅力のある人でしたから。でも、北部同盟もタリバンと同じ原理主義者で、どっちもどっちですよ（笑）。タリバンのほうが、潔癖な宗教色を持っていたとは言えますが、そんなに大きな違いはない。北部と南部は昔から仲が悪くて、その恨みをそれぞれが背負って対立しているという程度でしょう。北部同盟だって、タリバン以上に残虐なことをしてるんですよ。私はその虐殺現場を直接見たわけじゃありませんけど、消された人は大勢います。

小林　そんな北部同盟が、まるで民主化勢力の代表であるかのように報道されていたわけだ。

中村　北部同盟がカブールに入ってきたとき、民衆が白い旗を振って歓迎しているシーンがテレビにも流れましたからね。でも、誰が来たって旗を振るのは当然で、タリバンが入ってきたときも振ってましたよ。そうしないと危ないから。でも実際には、前日までカブール市民はタリバンに協力して、北部同盟を恐怖していたんです。カブールの廃墟を見て、「タリバンはこんなに壊したのか」

メディアのアフガン報道は嘘とインチキだらけ



メディアのアフガン報道は嘘とインチキだらけ

と思った人も多いでしょうけど、あれも半分は北部同盟が壊した（笑）。

小林　そうなのかー。伝えられていた話と全然違うな、こりゃ。しかも先生の話を聞いてると、納得することばかりなんですよ。

中村　そうですか。でも、そう言ってくださるのは小林さんぐらいで、私がこういう話をすると、すぐに「中村さんはタリバン寄りだから」と言われてしまうんです。

小林　わしと同じだ（笑）。わしは、その国の文化や歴史や伝統というものがあるはずだから、民主化と言ったって、その風土を生かした民主化しかできないはずだってことを訴えてるんですよ。その国の歴史そのものを破壊するようなやり方は、絶対にまずい。もともとアメリカは歴史がない国だから、それが理解できないんでしょうね。

中村　そのとおりで、アメリカのやっていることは、出来の悪い西部劇なんです。インディアンをバババッと撃ち倒して侵略していった建国以来の「伝統」が、まだ続いてるんじゃないでしょうか。人の命を数だけで言っちゃいけないけど、ニューヨークで死んだ二千数百人の百万倍の人間を、彼らはこれまでに殺してる。でも、彼らはそれを人間の頭数に入れていないわけですね。アフガンだって、ニューヨーク以上に殺されてます。しかも罪のない人たちが。ところが、「アメリカのやっていることはテロと同じだ」と言うと、それはタリバンを応援する偏った意見だと言う人がいる。こういうのは、バカタレとまでは言いませんが、困りますね。

小林　いや、それはバカタレですよ（笑）。

中村　だって、子供が死んだり親が死んだりすれば、人は悲しいわけですよ。それはアメリカ人だろうと、日本人だろうと、アフガン人だろうと同じでしょう。そういう感受性がアメリカ側にまったくない。西部劇の中で殺されるインディアンと同じように、人間だと思ってないんです。本当に出来が悪いですよ。

ヒューマニストの自己満足に終わる復興支援

小林　ところで、先ほど「誰を喜ばせるためにやっているのかわからない支援」が多いとおっしゃってましたけど、それはどういうことなんですか。日本は復興の手助けをしたという自己満足に浸って、もうすべて片づいたかのようなつもりでいますけど。

中村　これも結局、相手の立場を何も考えてないんです。たとえば支援の項目を見ると、「女性問題」というのがあります。フェミニズムです。まあ、女性を解放するのは別に悪いことではないんですが、少なくとも真っ先に取り組むような問題じゃありません。支援する側の優先順位がデタラメなんですよ。今アフガンに何が必要なのかという認識がなくて、自分たちの国で評価されるものが優先されてしまう。栄養失調で人がバタバタ死んでいる国で、「ブルカを脱げ」だの「近代教育が必要」だのと言ってる場合ではないんですよ。だいたい、自分のところの教育問題で手を焼いているような国が、よその国の教育システムを作りに行くなんて、悪い冗談としか思えないですね。

小林　ヒューマニストの自己満足ですよね。女性解放とか人権とか言ってれば、何かすばらしいことをしたような気になってしまう。相手の都合も考えないで、勝手に解放のストーリーを作り上げてるわけだ。

中村　ストーリーといえば、ジャーナリストも妙な予断を持って取材する人がいますよね。われわれのところでも、こんなことがありました。うちには爆破班というのが五つあって、井戸を掘るのに邪魔な巨石を爆破したり、用水路を掘るために

山の一部を削るのが仕事ですが、半分以上が元ゲリラ兵だった連中です。それが今はうちの職員として働いている。その中に本当に爆破好きの男がいて、ゲリラ時代は戦車の爆破を得意にしていたそうです。で、あるジャーナリストがその元ゲリラ兵に話を聞きに来たんですね。かつて人を殺すために使われた技術が、今は人を助けるために使われているというのは、なんとなく美談に仕立てられそうじゃないですか。だから、そういう結論を引き出そうとして「戦車を壊すのと、用水路を通すために爆破するのとどっちが楽しいですか」って質問するんだけど、本人いわく「どっちも好きだ」(笑)。

小林　単なる爆破マニアなんだ(笑)。

中村　火薬の使いすぎを戒めなきゃならないぐらいですよ。爆破しすぎて井戸を何本も潰してるんです(笑)。今度やったらクビにするぞって言ってるんですけど。それはともかくとして、ヒューマニストも露悪家も慈善家も含めて、みんな何か筋書きを作ろうとしますけど、結局、現地の当事者たちは当事者たちの論理で動いてるっていうことです。それがたまに人助けになったり人殺しになったりしてるわけで。

アメリカが戦争するのに手頃な国だったアフガン

小林　その点、中村先生はご自分の筋書きではやってらっしゃらないですよね。本業の医療を後回しにして、井戸を掘ってるわけだから。最初は現地でマラリヤなどの病人の治療をしておられたんだけど、そのうち干魃が起きて水がなくなり、泥水を飲んだ人たちがとにかく赤痢やら何やらにやられだしたので、これではどうしようもないと、まずは水を供給するところから始められた。相手にとって何が必要かを考えてらっしゃる。

中村　われわれが井戸を掘り始めたのは、アフガン大干魃の三年前なんです。その頃、WHOの発表では人口の半分の1200万人が被災して、400万人が飢餓状態、100万人が餓死線上にあるということでした。われわれの診療所の周りでも、村が消えていきよるんですわ。干魃で作物は枯れて、家畜の九割近くは死んだでしょう。だから、人々は村を棄てるんですね。患者がいないのでは診療どころではないので、井戸を掘り始めたんです。で、あの頃われわれが考えていたのは、こんなに悲惨な状態なんだから世界のニュースにならないはずはない、そのうち国連やら何やら救援団体がどっと押し寄せるだろうと考えていた。ところが、やって来たのは救援団体じゃなくて、国連の経済制裁だったんです。飢えて死にかけた人に食べ物まで制限するんですから、タリバンより国連のほうがよっぽど野蛮ですよ。国連も赤十字も、タリバンに追い出されたようなことを言ってますけど、自分たちから引き上げたんです。

小林　その制裁そのものが、きわめて曖昧な根拠に基づくものだったわけですよね。タリバンがアルカイダを匿っている、でもそれがどこにいるかわからんから、アフガン市民も巻き添えにして丸ごとぶっ潰してしまおうという話でしょ。当然、一般民衆も死ぬし、国土も荒れるし、タリバン自体が秩序を維持する勢力だったわけだから、それを崩壊させれば無秩序状態がやってくる。ところが潰した後に関しては、責任を持たない。一応は復興という言葉を使って、言い訳のために何かやってはいるけれど、じつはアフガンのことなんか何も考えていないんですよ。

中村　だいたい、そんなに簡単に人の命を奪っていいものなのか。法治国家なら「疑わしきは罰せず」が本当で、だからオウム事件でもあれだけ裁判をやって証拠を固めているわけでしょう。でも、9・11のときは証拠も何もなかった。なのに、

「ビンラディンがやったらしい」が「やったに違いない」になり、最後は「だから絶対に潰せ」とニュースがどんどん変わっていったんです。しかもその途中から、アルカイダばかりでなく、「それを匿ってるタリバンはこういう極悪非道な連中だ」という話になった。これは非常に危険な状態ですね。通信手段が発達して往来も自由になりましたが、そういう世界であるがゆえに、逆にメディアによって世論をコントロールしやすくなった気がします。

小林　そうですね。じゃあ、あのときビンラディンがあそこに本当にいたかどうかは、わからないんですか。

中村　それこそ証拠がないからわかりませんけど、たぶん、いたんじゃないですかね。でも一般民衆のあいだでは、そう深刻には受け取られていなかった。というのも、さっき言ったように、アフガンには、外来のお客様には手を出さない、大事にするという慣習があるんです。だから「ビンラディン氏はアフガニスタンのお客様である」という言葉が非常に説得力を持つんですね。

小林　まあ、かつて自分たちといっしょに旧ソ連と戦ってくれた人でもあるわけですからね、ビンラディンは。

中村　しかもイスラム教徒だし。孤立してる時期に助けてくれる人は他にいなかったわけですから、お客様として迎えてますと言われれば、ふつうの人は「ああ、そうですか」と言うしかなかったでしょうね。それにタリバンも含めた一般のアフガン人が積極的に反米テロを計画したわけじゃありません。第一、あのテロリストの中にアフガン人は一人もいなかったじゃないですか。

小林　あれはほとんどサウジアラビアの人間でしたもんね。

中村　問題は、そういう無実の人々がテロリストの烙印を押されて抹殺されようとしていることなんです。このぶんだと、そのうち日本もやられますよ。今でこそアメリカにペコペコしてるからいいけど、何かの手違いで摩擦が生じてくると、こんどは日本がそれこそ「納豆臭い奴だから、抹殺してしまえ」ということでやられてしまうかもしれない。

小林　アフガンをターゲットにした理由は、天然ガスのパイプラインを引くために、という話もありましたが、これについてはどう思われますか。

中村　政治や経済のことはよくわかりませんし、あそこは中央アジアの要衝ではあるんで、その布石だったという見方もあるかもしれませんが、あれだけの攻撃をすれば当然、恨みを買うわけですから、商売人ならそんなことのためにやりませんね。それよりも、やはりテロに対する国民の復讐心を晴らすために、とりあえずどこを叩こうかということで手頃な国として選んだのがアフガニスタンだったと私は思います。ビンラディンを匿っているし、女性人権団体からも非難を浴びているから、やりやすかったんですよ。実際、イラクに対してはあれだけの反対があったのに、アフガン空爆についてはそんなに深刻に反対した国はなかった。無実の国なのに、です。

小林　あのときは、国際社会も「仕方がない」っていう雰囲気になってましたね。本当にあそこにビンラディンやアルカイダを匿ってるなら、それもやむを得ない、と。

中村　ですから、天然ガスのことも二次的にはあったかもしれないけれど、一義的には「とりあえずここをやっつけておこう」ということだったと思います。

米軍が撤退したら、カルザイ政権は一日ともたない

小林　さて今後、アフガニスタンからアメリカが撤退すると、どういうことになるんですか。

中村　おそらくカルザイ政権は、米軍が撤退したら一日ももたないんじゃないですか。一日は言い過ぎだとしても、そう長くはもたない。カルザイはカブールにいて、地方にはほとんど行かないし、大統領官邸からもほとんど出ませんが、それを守っているのが米軍の特殊部隊なんですよ。これが主権国家だとは誰も思ってないですけど。

小林　傀儡（かいらい）政権みたいなものだ。

中村　小泉首相が、警視庁が信じられなくてアメリカの特殊部隊の応援を頼むなんてことは、日本ではあり得ないでしょう。だけどカルザイさんにも気の毒な面はあって、米軍はカルザイ政権を立てましたけど、同時に、タリバンを倒すために、反タリバン勢力に大量に金と武器を流して復活さ

せたんですね。つまり統一を妨げている各地域の軍閥を同じ米軍が援助しているということです。だから、米軍がおればアフガン統一ができない、しかし米軍が去れば現政権は崩れるという矛盾の中で何とか生き延びているわけで、これは長続きしないだろうと思いますね。

小林　本当に無責任ですね、アメリカは。

中村　結局、自分たちは安全な場所にいて、危ない仕事は地方の軍閥に下請けに出すわけですから、米兵の死亡者が少ないのも当たり前です。本来、戦争なら自分が前線へ出て銃をバンバン撃つものだと思いますが、そういう場面はまずない。

小林　しかも潰すだけ潰しておいて、後のことは何の構想もない。壊すのは簡単だけど、作るのは大変ですからね。歴史的にできあがっていたものを人工的に作れるかといったら、それはもう不可能に近いはずなんですが。しかしそれにしても、米軍の撤退でカルザイ政権が一日ともたないとなると、どうなっちゃうんですか。また権力の空白地帯ができあがってしまうわけでしょ。

中村　タリバンと似たようなものが名前を変えて出てくるでしょう。極端にいうと、おらが村がちゃんと食えるようになれば、誰でもいいんです。アフガンにおいて国家は水と安全を保障してくれればいい、いわば江戸時代の徳川幕府のような役割をしてくれればそれでいいというのが、アフガン人の一般的な感覚だと思います。国家という枠組みに甘えて何でもかんでも面倒をみてほしいということではない。もちろん、国家権力の威光を利用して混乱状態を鎮めてほしいという気持ちはあるでしょうが、逆に言うと、それ以上のものではない。いずれにしろ、タリバンを潰すといっても、極端な一部の勢力は別にして、タリバンがやろうとしたことはアフガンの伝統的慣習のエッセンスみたいなものですから、社会そのものを潰してしまわないとなくならない。だからタリバン的なものは消えないと思いますね。

小林　そうなったら、またテロリストが入り込もうと思えば入り込める状態になっちゃうわけですよね。

中村　というか、誰でも入り込みやすくなるんですね、逆に言うと。お客様は大事にするから、こっちが何もしなければ彼らも何もしない。こっちが攻撃すれば攻撃が返ってくる。弱い人が何かを表現する場合、テロ以外に方法がないということもあるんです。それだけ追いつめられているということですよ。それがいいとは言いませんけど、テロを受ける側にも何かあるんじゃないかと思ったほうが公平に見られるんですね。

小林　それはそうで、たとえばチベットは仏教国でテロをやらないから、中国に支配されっぱなしで、とうとうインドもそれを認めてしまった。

中村　テロリストの気持ちがわかるなんて言うと、お巡りさんにつけ狙われかねないご時世ですけど（笑）、言ってみれば赤穂浪士もテロリストだし、明治維新の志士だって、みんなテロリストだったんですよね。だから、やはりテロリストの言うことにも少しは耳を傾けてやらないといかんと思いますよ。

かつての親日感情を削ぎ、反日感情を作りだす弱い者いじめ外交

小林　だいたい、アメリカ自身が無政府状態の国を増やしているわけですから、自業自得ですよね。まあ、そのアメリカを支持している日本もテロの対象になる資格が十分にあるわけですが、アフガンの対日感情はどうなんですか。

中村　私が今までアフガンで仕事をしてこられたのは、日本の先人たちのお陰で、対日感情が非常にいい国だったからだと思っています。「だった」と過去形で言わざるを得ないんですけどね（笑）。なぜ彼らが日本人に良い感情を抱いていたかというと、やはり日露戦争の印象が強いんですよ。弱い日本が強い外敵ロシアから自分を守ったことが、彼らにとっても非常に大きな励ましになったんですね。ところが今は、その日本が弱い者いじめに加担する国になってしまった。アフガニスタンやタリバンなんて、日本の警察よりも弱いですよ。そういうところに大国の軍隊が来たら、かないっこない。赤子をプロレスラーが寄ってたかって殺すようなものでしょう。

小林　アジアの小国が強大なロシアを相手に戦ったからこそ夢があったのに、今は最強国の尻馬に乗ってるだけですからね。そりゃあ、アフガン人も幻滅しますよ。

中村　正当な理由で敵を作るならともかく、他人

メディアのアフガン報道は嘘とインチキだらけ

の敵を自分の敵にしておいて、「邦人が危ない」なんて、そんなバカな話はないですよ。

小林　アフガンに限らず、イラクやパレスチナでアメリカがやってることも絶対に失敗してしまうから、いずれ日本も道徳的に世界から糾弾されるときが来ますよね。あれだけアメリカが介入しておきながら、全部失敗して引き上げざるを得なかったという歴史ができあがってしまって、日本も「いったい、どんな道義的根拠があってアメリカを支持していたのか」と問われることになる。そのとき日本は何をやったのかっていったら、ただ追随していただけ。それが自分の孫たちに伝えられていくんです。

中村　弱い者の立場に立って「こんなことしちゃいかん」と強い者に立ち向かうならともかく、強い者に追随して弱い者いじめの仲間に加わるなんて、こんなに恥ずかしいことはないですね。

小林　わしも以前はいわゆる保守派と呼ばれる陣営にいて、歴史教科書なんかも作ったんですけど、その保守派の人たちがみんなアメリカ支持になってしまったもんだから、ケンカして出てきてしまったんですね。結局、そこで左翼だの右翼だのと言ってたって、関係ないんですよ。わが国はわが国のルールを文化の中で形成してきたし、彼の国には彼の国の伝統や文化があるわけだから、それを大切にしないと自国の伝統にすら誇りが持てないはずなんです。ところがアメリカは自由と民主主義という人工的なイデオロギーにすぎないものを、世界中に普遍化しようとする。そのアメリカに、日本が自国の歴史や文化に対する誇りも何も打ち捨ててくっついていくなんて、わしには耐えられない。

いま必要とされる「健全なる復讐心」

中村　左とか右とか、そういう政治的な立場以前の問題ですよね。自分の生活スタイル全体を善として他人に押しつけて平気でいられるという感覚は、私はよくわからない。かつてソ連は、「人民の権利を実現する」と言いながら、その目的のために人民を殺すという矛盾したことをやっていましたが、今のアメリカがやってることは、ソ連がやってきたこととまったく同じです。むしろ、昔のソ連以上に凶暴化している。アメリカもそれだけ自分の見せかけの繁栄を維持することだけに汲々(きゅうきゅう)として、弱くなってるのかもしれませんが。

小林　「文明と野蛮の衝突」とかっていう観念そのものが、おかしいわけですよね。まさにその人権の名において人を殺すようなイデオロギーそのものが野蛮なのであって、逆に、今まで野蛮だと言われていたアフガニスタンやタリバンの中にも客人を歓待するというような美徳がある。それこそが文明の証明かもしれないわけだから。

中村　そうですね。そういう形で真心を表したり、親切を表したりすることで、人の絆(きずな)が培われる土俵ができあがっていく。日本も、そういう伝統や文化を失ってしまったら国籍不明の得体の知れない国になっていくような気がします。今の日本人は、日本人の顔をしてるけど、もう本当の日本人じゃないのかもしれない。だって、たとえば靖国神社に祀(まつ)られている人々は、アメリカに言わせればみんなテロリストでしょ。

小林　そうですね。9・11のテロを「カミカゼアタック」って呼んでいたぐらいですから。

中村　ならば、テロしか残されていなかった弱い者の立場で物事を考えられるはずじゃありませんか。

小林　それこそ日露戦争もそうだし、大東亜戦争もそうですけど、昔の日本人のほうが今よりもはるかに道徳的でしたよ。たぶん彼らが今の日本の状態を見たら、「こんなアメリカへの追従の、どこに正義があるんだ」と言うでしょうね。

メディアのアフガン報道は嘘とインチキだらけ

中村　たしかに、日本人としての誇りとか、弱い者いじめはいけないとか、そういう素朴な正義感は昔のほうが強かったでしょう。だからこそ、20年前、私も日本人としてアフガン社会に受け容れられたんです。それぐらい日本は信用されていた。弱いアジアの人たちの支持を得ていた。それが今では、彼らが嫌う米国の一番目の子分になって、弱い者に襲いかかる。せっかく先輩たちが築いてきた遺産を食い潰してしまったのでは、われわれの祖先にも子孫にも申し訳ないですよ。

小林　原爆で30万人も殺された国が、今さら親米になるなんてことあり得ないでしょうという話ですよね。そういう意味では、「必ず復讐する」というアフガン人の不文律が羨ましいですよ。その復讐するという感覚がなかったもんだから、日本人はあっという間にアメリカに洗脳されてしまったわけで。

中村　たしかに日本も、血なまぐさい意味ではなくて、もうちょっと復讐心があっていいと思いますね。殺す殺さない、戦争するしないは別にして、「あの恨みは忘れんぞ」と。それは、肉親を殺された人間が、「俺たちも悲しかったけど、おまえたちも悲しかろう」と訴えることなんです。私のうちも、福岡の大空襲では父方が全滅したんですよ。ただ、復讐なんてことを言うと誤解されますけどね。

小林　でも法律だって、底辺には復讐の観念が流れてますよ。被害者の復讐感情をどこかで満たすという感覚はどんな法律にも基本的なところであるでしょう。

中村　そうですね。アフガンの場合も、復讐に関する不文律が一つの犯罪抑止力になっている面があります。誰だって殺されたくないわけですからね。それに、復讐の慣習が徹底している農村ほど、そこで暮らしている人々にやさしさがあるような気もしますよ。そういう意味では、健全な復讐心というのは大事なものかもしれません。

目先の国益に向かって暴走する日本の危険

小林　それにしても、聞いてみないとわからないことがたくさんありますね。今までアフガン問題に関してはいろんな本が出てますけど、実際のところはどうなのかが、わしにはよくわからなかったんですよ。でも今日、中村先生のお話を聞いて

メディアのアフガン報道は嘘とインチキだらけ

いると、腑に落ちることばかりです。

中村　何よりもまず、事実を知ってほしいですね。その上で政治的な議論をするのはいいけど、事実が正しく伝わってない状態でいろいろな話をされるのは、現場で仕事をしているわれわれから言うと迷惑でしかない。たとえばマスコミは、実態も知らずに「タリバンの迫害から逃げてくる難民」なんて言っていましたけど、あれは迫害から逃げたんじゃなくて、干魃で村にいられなくなったんです。そういう人たちが大半なのに、難民を守るために自衛隊を派遣するとかね、こんなバカな筋書きがあるのかと言いたくなりますよ。だから、今起きつつある現状を、ちゃんと見てもらいたいんです。アメリカがやったこと、日本がやったことを、もういっぺん見直してほしい。いろんな考え方があるでしょうが、異なった文化や生活習慣の中にもわれわれと同じような人間が暮らしている、そのことを忘れてはいけないんです。そこから目を逸らしていると、今後も自己満足にすぎない無駄な支援や、意味のない戦争が続いてしまう。

小林　イラクのときもそうだったんですけど、どうも、何かあるたびに小泉とブッシュのあいだで妙に意気投合した雰囲気を作り上げて、そこで合意されたことは何が何でも国会で通さなければならないという空気になってしまうんですよね。マスコミもそれを徹底的に問題にするような姿勢を見せないし、国民もまったく関心を持たない。わしなんかがいくら言っても妙に醒めてて、「これはいくら何でも無茶苦茶じゃないか」という議論が巻き起こらないんです。奇妙に諦め切った、どうでもいいような感覚になっている。この日本人の無関心・無気力さっていうのが、ものすごく変ですよね。よく戦前の日本のことを「軍が暴走した」って言う人がいるけれど、別に軍が政権を握っていなくても、この国はシビリアンコントロールの中でさえ、一つの方向に向かって暴走するわけですよ。それは国民がまったくチェックしないからなんですよね。

中村　概して今の日本人について言えるのは、北朝鮮問題に国民があれだけ熱中するのを見てもそうだし、イラク攻撃もそうでしたが、やはり弱い者に対して居丈高になるということですね。これはじつに日本人らしからぬことで、どこかで何かを間違ってしまったとしか思えません。相手が大国であっても、弱い者を守るために食いついていくのが本来の日本人だと私は思いますよ。

小林　目先の国益しか考えてないから、そういう情けない態度が何十年か後にどう評価されるかなんてことまで頭が回らないんです。今の自分が生き延びることだけで精一杯で、子孫のことまで考える余裕がない。

中村　そういうことでは、アフガンの人たちが何を求めているかに気が回るはずがないですよね。彼らはほとんどが農民ですから、望んでいることはそんなに特別なものではなく、人類共通のものなんですが……。それを支援してやれば、みんな喜んで協力するんですよ。そのあたりの感覚が、アメリカも日本も欠落している。外国人がやって来ては、タリバンだの反タリバンだの民主主義だの新保守主義だのと小難しいことを言ってるから、うまくいかない。

小林　そうですね。でも、どう考えたって、アメリカのやり方はもたないと思いますよ。イラクも無茶苦茶だし。それが破綻して日本の信頼が失墜する前に、中村先生のような日本人を少しでも増やさなければいけませんね。